

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 2 7 9 号	氏 名	本 岡 勉
<p>[論文題名] Foot pressure distribution in patients with gonarthrosis</p> <p>雑誌名 : The Foot 巻・頁・年 : 第 22 巻・70 - 73 頁・2012 年</p> <p>著者名 : Tsutomu Motooka, Hirofumi Tanaka, Shuya Ide, Masaaki Mawatari, Takao Hotokebuchi</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】下肢アライメントは、立位静止状態では膝関節の内・外反変形に対応して距骨下関節が回内あるいは回外し調整されるといわれる。しかし歩行という動きの中、heel off以降は接地するのは前・中足部であるため距骨下関節のみでは説明がつかず、この時期のアライメント調整についての報告はなかった。そこで本研究では、膝関節に由来する下肢アライメント異常が歩行周期後半に調整できているのか解明することを目的とした。</p> <p>【方法】片側変形性膝関節症患者 46 例(平均年齢 69 歳)を対象とした。対象を膝外反群、正常群、膝内反群に分けて、センサシートを用い歩行周期後半の足底圧分布を調べた。(1) 足部中央での足圧中心の通過部位を計測した。(2) 中足骨頭部での足底圧分布様式を内側に集中するものから外側に集中するものまで 5 型に分類し、各群の比率を調べた。(3) 足圧中心の軌跡が内側で終わるものから外側で終わるものまで 4 型に分類し、各群の比率を調べた。</p> <p>【結果】膝外反群は足底内側に、膝内反群は足底外側に圧が集中するパターンが多かった。</p> <p>【考察】アライメント調整が十分ならば、膝の内外反にかかわらず足底圧は一樣な分布を示すはずだが、結果はそうではなかった。足部の構造上、下肢アライメント調整には前足部ほど大きな動きが必要であることが理由の一つと考えられた。</p> <p>【結論】歩行周期後半には下肢アライメント異常が完全には調整されないことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第280号	氏名	岸川 陽一
<p>[論文題名] Initial non-weight-bearing therapy is important for preventing vertebral body collapse in elderly patients with clinical vertebral fractures 高齢者の臨床椎体骨折に対する初期非荷重療法の重要性</p> <p>雑誌名, 巻(号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 International Journal of General Medicine, 5, 373-380, 2012</p> <p>著者名 Kishikawa Y 岸川陽一</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的 骨粗鬆症性脊椎圧迫骨折については標準的な治療法が確立されておらず、偽関節率に関しては13-20%と報告されており、疼痛および機能障害が残存する。臨床的脊椎圧迫骨折の高齢患者では、椎体圧壊の予防において、従来の排泄や食事の際に座位を許可する一般的安静療法よりも初期に非荷重安静を行う方が有益性が高いのではないかと、という仮説を臨床において比較検討した。</p> <p>方法 1999年1月から2007年3月までの期間に治療のため入院した臨床的脊椎圧迫骨折の症例、合計196例(平均年齢78歳)を解析対象とした。初期非荷重安静療法(103例)その他の患者に対しては、従来の一般的安静による治療を行った(93例)。</p> <p>結果 椎体前方部および後方部の圧壊率(高さの減少)は、初期非荷重安静療法群の方が従来の一般的安静療法群に比べて有意に低いことが示された。12週間の治療後、骨癒合率は初期非荷重安静療法群で100%、一般的安静療法群で97%であった。</p> <p>考察 本研究では、初期非荷重安静療法群では、従来の一般的安静療法群に比べて脊椎骨折の重症度が比較的高かったにもかかわらず、椎体圧壊は少なかった。その他の利点としては、疼痛発症から2週間以内に治療を開始した場合の骨癒合率の高さ、骨折の整復の可能性および疼痛緩和効果が挙げられる。</p> <p>結論 臨床的脊椎骨折が認められる高齢患者において椎体圧壊を予防するには、初期非荷重安静療法が重要である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・㉔	第 2 8 1 号	氏 名	戸 山 真 吾
<p>[論文題名] Long-term Results of Carbon Ion Radiation Therapy for Locally Advanced or Unfavorably Located Choroidal Melanoma: Usefulness of CT-based 2-Port Orthogonal Therapy for Reducing the Incidence of Neovascular Glaucoma</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 International Journal of Radiation Oncology Biology Physics, Epub ahead of print</p> <p>著者名 Shingo Toyama, Hiroshi Tsuji, Nobutaka Mizoguchi, Takuma Nomiya, Tadashi Kamada, Sunao Tokumaru, Atsushi Mizota, Yoshitaka Ohnishi, Hirohiko Tsujii, And the working group for ophthalmologic tumors</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】脈絡膜悪性黒色腫(CM)の炭素イオン線治療の長期成績を解析すること、及び 2 門照射の意義を検討すること。</p> <p>【方法】対象は 2001 年 1 月から 2011 年 7 月に CM に対して炭素イオン線治療を施行した 114 例で、UICC 第 5 版の分類で T3N0M0 は 106 例、T2N0M0 は 8 例だった。総線量は 60-85GyE で、5 回分割で照射した。全症例 CT を用いた治療計画を行い、当初は 1 門 (63 例) だったが、血管新生緑内障 (NVG) 発生率の低減を目的に 2005 年以降はなるべく 2 門 (51 例) を選択した。</p> <p>【結果】観察期間中央値は 4.6 年で、5 年全生存率は 80.4%、5 年局所制御率は 92.8%、5 年眼球温存率は 92.8% だった。3 年 NVG 発生率は 29.7% であり、1 門群 41.6% に対し、2 門群では 13.9% で、統計学的に有意に低かった ($P < 0.001$)。また、虹彩網様体の 50GyE 以上照射された体積が 0.1ml 以上の群は低い群に対して NVG 発生率が統計学的に有意に高かった ($P < 0.001$)。</p> <p>【考察】他施設の報告と比較し、生存率、局所制御率、眼球温存率はほぼ同等だったが、2 門群の NVG 発生率は低かった。また、2 門にすることにより虹彩網様体の高線量照射体積が減少し、結果として NVG 発生率が低減したと考えられた。</p> <p>【結論】CM に対する炭素イオン線治療の長期成績は良好であり、2 門照射は NVG 低減において有用であった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	河野 俊介
<p>[論文題名]</p> <p>Failure Analysis of Alumina on Alumina Total Hip Arthroplasty With a Layered Acetabular Component Minimum Ten-Year Follow-Up Study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 The Journal of Arthroplasty (Epub ahead of print)</p> <p>著者名 河野俊介, 園畑素樹, 嶋崎貴文, 北島将, 馬渡正明, 佛淵孝夫</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: 人工股関節の ceramic 摺動面は polyethylene 磨耗による問題の解決を目指し、日本でも Alumina Bearing Surface (ABS) System が開発されたが、ceramic liner の破損や脱臼が報告され販売中止となっている。今回、同機種 of 10 年超の臨床成績と破損危険因子を明らかにする事を目的とした。</p> <p>対象: ABS system を用いて人工股関節全置換術を行った 270 股を対象とした。</p> <p>方法: JOA score と術後合併症を調査し、再置換術を end point とした生存率を算出した。ceramic implant 破損の有無で 2 郡に分類し、破損危険因子解析を行った。</p> <p>結果: JOA score は 44 点から 87 点へ改善した。脱臼 12 股、loosening 4 股、stem neck 破損 1 股、ceramic implant 破損 50 股、血腫 1 股を認め、58 股に再置換術を行い、生存率は 68%であった。破損危険因子として年齢、身長、術前伸展可動域、脱臼が有意な変数として算出され、脱臼の破損危険リスクは 6.2 倍であった。</p> <p>考察: ceramic on ceramic THA では良好な長期成績も多数存在するが、破損により成績が低下するとの報告もあり、破損原因として cup の設置角度、辺縁 impingement、材質不良などが挙げられている。本研究では、臨床成績は改善したが、ceramic implant 破損を 50 股に認め、最大 13 年の生存率は 68%と低値であった。危険因子として脱臼による衝突や広い可動域による impingement が算出された。しかし、危険因子が存在せず破損する症例もあり、sanwich liner である implant 形状にも問題があったと考えられた。</p> <p>結語: 破損症例は今後も増加する可能性が高く、危険因子を有する症例は特に注意する必要がある。ceramic on ceramic THA は硬度、低摩耗性の利点を有しており、liner 形状・固定様式を変更することで良好な長期成績が期待できるかもしれない。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	岩村 高志
<p>[論文題名]</p> <p>佐賀県における院外心停止患者のウツタイン様式による検討</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of Nippon Medical School, 80(3), 184-191, 2013.</p> <p>著者名 岩村高志、阪本雄一郎、朽方規喜、中島厚士、山下友子、西村洋一、小網博之 今長谷尚史、八幡真由子、後藤明子</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的：ウツタイン様式は、院外心停止例における救急医療システム評価に適するが、その詳細な報告は少ない。各蘇生過程の要因と蘇生率との関係を比較検討することで、システムの要改善点を具体的に検討し発信すること。</p> <p>方法：2010年7月から1年間の佐賀県のウツタインデータ800例を対象とした。全消防本部をA-Eの5地区に分類し、年齢、性別、心停止の原因、発生場所、救急隊現着時初期波形、病着時波形、目撃、市民による蘇生、指令室からの口頭指導、病着前の医療行為、搬送時間に関して5地区間の自己心拍再開率と比較検討した。</p> <p>結果：心拍再開率は、D・E地区が有意に低かった。背景因子では、年齢、性別、心停止の原因、発生場所、目撃の有無、初期波形、病着時波形、除細動・薬剤投与の有無には5地域間で有意な差は認めなかった。現着までの応答時間は、A・D・E地区が有意に短かった。口頭指導率は、E地区が他の地区と比較して有意に低く、市民による蘇生施行率は、A・D・E地区が有意に低かった。蘇生処置の口頭指導がある場合、約70%の市民は蘇生を施行するが、口頭指導がない場合、90%近い率で施行されなかった。</p> <p>結論：県下各地域の心拍再開率の差が明らかとなった。心拍再開率改善には、該当地域における口頭指導の質の改善と口頭指導マニュアルの見直し、また電話指示による市民への勇気の後押しが重要である。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

論 文 要 旨

報告番号 甲 ・ ㉔	第 号	氏 名	緒方敦之
<p>[論文題名] Carotid artery stenting without post-stenting balloon dilatation</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of NeuroInterventional Surgery 0:1-4 (published Online September 7, 2013)</p> <p>著者名 Atsushi Ogata, Makoto Sonobe, Noriyuki Kato, Tomosato Yamazaki, Hiromichi Kasuya, Go Ikeda, Shunichiro Miki, Toshio Matsushima</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】後拡張を省略した頸動脈ステント留置術(carotid artery stenting; CAS)の治療成績を検討する。</p> <p>【対象と方法】2005年5月より2012年4月までに後拡張を省略したCASは169患者176例であり、これを対象とした。術後30日以内の脳卒中、心筋梗塞、死亡および術翌日のMRI-DWI高信号の出現、術後31日から1年の同側脳卒中および再狭窄について検討した。</p> <p>【結果】症候性病変108例、無症候性病変68例であった。30日以内の脳卒中は4例(2.3%)であった。無症候性病変では、脳梗塞を1例(2.8%)、症候性病変では、脳梗塞を1例(0.9%)、頭蓋内出血を2例(1.9%)に生じた。心筋梗塞および死亡はなかった。MRI-DWI高信号の出現は、26例(14.8%)であった。全例でCAS後1年以上の経過観察が可能であった。CAS後31日から1年で同側脳卒中を来した例は2例(1.1%)であり、再狭窄は6例(3.4%)であった。2種類の遠位塞栓防止デバイスを用いており、フィルタープロテクション(Filter Wire EZ[®]を使用した)は60例、バルーンプロテクション(Guard Wire[®]を使用した)は116例であった。両群間で周術期脳卒中、術後MRI-DWI高信号の出現に有意差はなかった。【考察】これまでCASは内膜剥離術に比べて塞栓性合併症が多いといわれてきたが、本研究において塞栓性合併症は低率であった。後拡張を省略することはプラークの破壊を最小限にし、塞栓性合併症の低減に寄与していると考えられる。【結論】後拡張を省略したCASは、特に不安定なプラークを有することが多い症候性病変に対して有効な方法であるといえる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	麓 英征
<p>[論文題名] IN VIVO ACUTE PERFORMANCE OF THE CLEVELAND CLINIC SELF REGULATING CONTINUOUS FLOW TOTAL ARTIFICIAL HEART</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 The Journal of Heart and Lung Transplantation, 29, 21-26, 2010</p> <p>著者名 Hideyuki Fumoto, MD, David J. Horvath, MSME, Santosh Rao, MD, Massiello Alex, MEBME, Tetsuya Horai, MD, Tohru Takaseya, MD, PhD, Yoko Arakawa, MD, Nicole Mielke, BS, Ji-Feng Chen, BS, Raymond Dessoffy, AA, Kiyotaka Fukamachi, MD, PhD, Leonard A. R. Golding, MB, BS</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: We have developed a unique, valveless, sensorless, pulsatile, continuous flow total artificial heart (CFTAH) that passively self-balances left and right circulation without electronic intervention. The main purpose of this study was to evaluate CFTAH acute <i>in vivo</i> pump performance.</p> <p>方法: The CFTAH was implanted in 2 calves through a median sternotomy. Pump and hemodynamic performance were recorded at baseline over the full range of pump operational speeds (2,000 to 3,000 rpm) in 200 rpm increments and under a series of induced hemodynamic states created by varying circulating blood volume (CBV) and systemic and pulmonary vascular resistance (SVR, PVR).</p> <p>結果: The CFTAH fit well anatomically with uncomplicated surgical procedures using a median sternotomy approach. Sixty of the 63 induced hemodynamic states in Case #1 and 73 of 78 in Case #2, met our design goal of a balanced flows and maximum atrial pressure difference of 10 mm Hg. The correlation of calculated vs. measured flow and SVR was high ($R^2 = 0.857$ and 0.832), allowing validation of an additional level of automatic active control. By varying the amplitude of sinusoidal modulation of the speed waveform, 9 to 18 mm Hg of induced pulmonary and systemic arterial pressure pulsation was demonstrated.</p> <p>考察及び結論: This study validated CFTAH self-balancing of left and right circulation, induced arterial flow and pressure pulsatility, accurate calculated flow and SVR parameters and the performance of an automatic active control mode in an acute <i>in vivo</i> setting in response to a wide range of imposed physiologic perturbations.</p>				

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	谷口 一登
<p>[論文題名] Interleukin 33 Is Induced by Tumor Necrosis Factor α and Interferon γ in Keratinocytes and Contributes to Allergic Contact Dermatitis</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of Investigational Allergology & Clinical Immunology, 23(6), 428-434, 2013</p> <p>著者名 Kazuto Taniguchi, Shuichi Yamamoto, Emiko Hitomi, Yukiko Inada, Yukari Suyama, Takashi Sugioka, Yuhei Hamasaki</p> <p>[要 旨]</p> <p>< 目的 > IL-33 は壊死などのストレスにさらされた上皮細胞や内皮細胞から放出される。アレルギー性接触性皮膚炎に関与する様々な免疫細胞に対する IL-33 の作用は多数報告されてきたが、アレルギー性接触性皮膚炎において IL-33 を誘導するメカニズムは十分に解明されていない。今回我々は IL-33 産生を誘導する因子を同定し、IL-33 及びその誘導因子のアレルギー性接触性皮膚炎における機能を解析した。</p> <p>< 方法 > まず、アレルギー性接触性皮膚炎に関与する種々のサイトカインで正常ヒトケラチノサイト細胞株である KERTr 細胞を刺激し、IL-33 mRNA 発現、蛋白産生誘導をそれぞれリアルタイム PCR 及び免疫染色、ウェスタンブロットで解析した。次に、アレルギー性接触性皮膚炎モデルマウスを作製し、中和抗体を用いて IL-33 及びその誘導因子の機能を解析した。</p> <p>< 結果 > TNF-α と IFN-γ は KERTr 細胞における IL-33 mRNA 発現と蛋白産生を誘導した。抗 IL-33 抗体、抗 TNF-α 抗体、抗 IFN-γ 抗体をアレルギー性接触性皮膚炎モデルマウスの患部に皮下投与すると炎症所見が抑制された。</p> <p>< 考察 > TNF-α と IFN-γ はケラチノサイトにおける IL-33 の誘導因子である。</p> <p>< 結論 > IL-33、TNF-α、IFN-γ 阻害はアレルギー性接触性皮膚炎の新しい治療戦略となり得る。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲 ・ ㉔	第 号	氏 名	大枝 敏
<p>[論文題名]</p> <p style="text-align: center;">Survival Advantage of Radiofrequency Ablation for Hepatocellular Carcinoma: Comparison with Ethanol Injection</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Hepato-Gastroenterology, 60, Epub ahead of print, 2013</p> <p>著者名 Satoshi Oeda, Toshihiko Mizuta, Hiroshi Isoda, Takuya Kuwashiro, Shinji Iwane, Hirokazu Takahashi, Yasunori Kawaguchi, Yuichiro Eguchi, Iwata Ozaki, Keitaro Tanaka, Kazuma Fujimoto</p> <p>[要 旨]</p> <p>< 目的 > 2000 年より肝細胞癌(HCC)の局所治療は経皮的エタノール注入療法(PEI)からラジオ波焼灼術(RFA)が主流となった。この治療法の変遷が予後に与える影響、すなわち PEI と RFA の長期予後を比較すること。</p> <p>< 方法 > 1990 年から 2004 年までに佐賀大学医学部附属病院にて初発 HCC に対して局所療法を行った 213 例が対象。</p> <p>< 結果 > 解析対象は 3 年以上経過を追えなかった症例を除外した 190 症例(PEI 98、RFA 92)。累積生存率は 2 群間で有意差を認めなかったが、Stage II 症例では RFA 群は PEI 群に比べ累積生存率が高かった(p=0.033)。 腫瘍個数が単発症例は累積生存率に有意差はないが、多発症例は RFA 群が高かった(p=0.028)。同様に最大腫瘍径が 20mm 以下の症例は有意差はないが、21-30mm の症例は RFA 群が高かった(p=0.040)。 Cox 比例ハザードモデルを用いた多変量解析を行うと、Stage II 症例で RFA は生存予後に關与する独立した因子として抽出された。</p> <p>< 考察 > Stage I は腫瘍径 20 mm 以下で単発であるため RFA 同様に PEI で治療が可能であること、Stage III は腫瘍径 21-30 mm で多発であるためどちらの治療でも腫瘍を制御できない可能性が有意差を認めなかった理由として考えられた。</p> <p>< 結論 > Stage II 症例に対して、RFA は PEI より長期予後に優れていた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名	富田 由紀子
<p>[論文題名] Identification of 62-kDa protein as an immunogenic antigen of <i>Vibrio vulnificus</i> for humans</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Fukuoka Acta Medica, 104 巻, 222-233, 2013</p> <p>著者名 Yukiko Tomita</p> <p>[要 旨] <i>Vibrio vulnificus</i>(<i>V.vulnificus</i>)は、世界中の沿岸海水中に広く生息し、本菌に汚染された魚介類の生食や創傷からの菌の侵入により感染する。発熱、四肢の壊死性筋膜炎等の症状を呈し、短期間で死に至る極めて予後不良の疾患である。<i>V.vulnificus</i> 感染症患者の多くは基礎疾患に肝硬変や肝癌等の肝機能障害を有する。日和見感染である本症において有効なワクチンの開発が重要である。今回我々は、<i>V.vulnificus</i> のヒト血清における免疫原性の高い抗原を確認することを目的とし、<i>V.vulnificus</i> 感染症患者 10 名の血清を用いた菌溶解液 (<i>V.vulnificus</i>7 株、<i>V.parahaemolyticus</i>1 株) の immunoblotting を施行し、感染による抗体産生を分析した。発症時からすでに見られる 62-kDa の band は、患者のみならず <i>V.vulnificus</i> 感染症未発症の慢性肝機能障害者及び肝機能正常者のいずれの血清を用いた immunoblotting においても共通して認められた。また、<i>Escherichia.coli</i> や <i>Klebsiella pneumoniae</i> を用いた実験でも同様の反応を認め、交差反応を起こしている可能性も考えられた。今回の実験から、<i>V.vulnificus</i> の 62-kDa の蛋白がヒトにおける免疫原性の高い抗原の一つであることが予想された。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	樋渡 敦
<p>[論文題名]</p> <p>PCI Using a 4-Fr “Child” Guide Catheter in a “Mother” Guide Catheter : Kyushu KIWAMI ST Registry</p> <p>雑誌名 , 巻 (号のみの雑誌は号) , 頁 - 頁 , 発行西暦年 Catheterization and Cardiovascular Interventions, 76(7), 919-923, 2010.</p> <p>著者名 <u>Atsushi Hiwatashi</u>, Masashi Iwabuchi, Hiroyoshi Yokoi, Shinji Tayama, Tomohiro Sakamoto, Katsuo Noda, Yoshisato Shibata, Yutaka Hikichi, Koichi Node, Takafumi Ueno, Masakiyo Nobuyoshi</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究目的：従来の留置法ではステント留置困難症例において、新しく開発された 4Fr.ストレートカテーテル(KIWAMI ST01)を用いたステント留置の有効性を評価すること。</p> <p>方法：対象は 2009 年 10 月から 2010 年 3 月までに Kyushu KIWAMI ST Registry に参加した 6 施設で行われた PCI 症例の中で通常の方法では病変までステント挿入できなかった 32 例に対し KIWAMI ST01 を用いたステント留置を試みた。KIWAMI ST01 の挿入方法は直接挿入法、バルーンアンカー法、Pushmi-pull yu 法のいずれかを用いた。結果：全 32 例 45 病変においてステント留置に成功した(100%)。いずれの症例においてもステント脱落は認めなかった。主要合併症は認めなかった。考察：従来の 5Fr カテーテルは太く硬いこと、表面に親水コーティングされていないことから冠動脈内へ深く挿入すると冠動脈損傷のリスクが高かった。また、Dio という同様なカテーテルは屈曲病変ではカテーテル内腔を保持できずステント挿入できないことがあった。しかし専用開発されたこのカテーテルは細くやわらかさがありながらステンレスメッシュ構造による内腔保持性の高さから全例においてステント挿入に成功できた。結論：通常の方法でステント通過が困難な症例において、全例ステント留置させることに成功した。多施設、前向き研究においても初期手技成績は良好で主要合併症もなく安全な方法であった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	森本 忠嗣
<p>[論文題名]</p> <p>The termination level of the conus medullaris and lumbosacral transitional vertebrae</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年</p> <p>The Journal of Orthopedic Science, 18:878-884, 2013</p> <p>著者名</p> <p>Tadatsugu Morimoto, MD, Motoki Sonohata MD, PhD, Masaru Kitajima, MD, PhD, Hiroaki Konishi, MD, PhD, Koji Otani, MD, PhD, Shin-ichi Kikuchi, MD, PhD, and Masaaki Mawatari, MD, PhD,</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的:</p> <p>脊髄円錐下端高位 (TLCM) の正確な高位分布を評価するには脊椎変形の少ない若年者を対象にする必要があるが、報告例の多くは高齢者を含めている。また、腰仙部移行椎例の神経根機能の髄節レベルは、正常例と異なるため、腰仙部移行椎例では TLCM の高位分布も偏位している可能性がある。本研究の目的は、若年者における腰仙部移行椎と TLCM との関係について検討することである。</p> <p>対象と方法:</p> <p>腰部椎間板ヘルニア手術例 379 例 (男性 249 例、女性 130 例、平均年齢 31 歳 (15~44 歳)) を対象とした。移行椎の定義は最下位腰椎の横突起が、仙椎と何らかの形で癒合している症例とした。第 5 腰椎の仙椎化 (L4/移行椎群) 28 例、第 1 仙椎の腰椎化 (L5/移行椎群) 41 例、正常群 310 例の TLCM を MRI を用いて評価した。</p> <p>結果:</p> <p>TLCM の平均(範囲)は正常群 L1 中央 (T12 頭側~L2 中央)、L4/移行椎群 L1 頭側 (Th12 頭側~L2 頭側)、L5/移行椎群 L1 尾側 (Th12 尾側~L2 尾側) であり、L4/移行椎群の TLCM は正常群より頭側に (P<0.001)、L5/移行椎群の TLCM は正常群より尾側に位置していた (P<0.001)。</p> <p>考察:</p> <p>腰仙椎部移行椎例の TLCM は神経根機能の髄節レベルと同様に、正常例に比し、L4/移行椎群では頭側に、L5/移行椎群では尾側に偏位していた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。